

弔 辞

早期胃癌研究会が胃と腸の研究の推進において、世界をリードする躍目に値する業績を誇りえたのは、臨床病理面での大きな寄与が基盤にあったからであります。佐野量造博士は、その貴重な道標でありました。

常に元気潑刺として思うところを直言して憚らず、国内のみならず海外にも啓蒙指導の役割を果たしていただきました。その開拓の情熱の響きは、今もお耳朶に新しいことです。その深い同志的信頼の紐帯は、幽明境を異にしても、なお絶ちがたいものがあります。

早期胃癌研究会の機関誌「胃と腸」の編集委員会が甲論乙駁、深更に及んでもなお安易に議を決することなく、案の精選を期する習わしとなったのも、その情熱と相互信頼のなせるわざでありました。

思えば十余年をけみしたその歩幅は、哀歎の交々到るていのものであるよりは、辛酸を嘗め盡くしたものであったでありましょう。後進を誘掖して、今後はその成果をこそ収穫すべき時に、俄に二豎のおかすところとなりました。厖大な資料を駆使して心血を注がれた「胃疾患の臨床病理」のライフワークは、永遠にその主を失うにいたりました。身を挺して生涯の研究に思い定めた専門の病に倒れたことは痛恨のきわみです。

在天の靈よ、早期胃癌研究会は、声なき声に励まされて、付託の責を果たすべき決意を新たにす次第です。

謹しんで弔辞といたします。

昭和五十一年二月十八日

早期胃癌研究会代表 村上忠重

編 集 後 記

「胃スキルの病理」の特集に当って

「胃と腸」編集委員会

本号は「胃スキルの病理」をテーマに特集を編んだ。本号には、故佐野量造先生の御遺志を実現したいという編集委員の願いがこめられている。

佐野先生が他界されたのはことしの2月16日であった（「胃と腸」4月号）。その後の「胃と腸」編集委員会の定例会議でもひとしきり佐野先生の生前の思い出が話し合われた。その中で「先生はもう一度“スキル”をテーマに特集を組んでみたい」ともらされていたとお話が出た。また、1975年秋の消化器関連三学会の合同大会（長崎）においてシンポジウム「スキルスをめぐる諸問題」の御司会をされたことも思い起こされた。こうして「スキルス」特集の構想は出来上がったのである。

目次にみるように主題論文5本、研究2本、座談会および関連症例という構成にし、併せて佐野先生の御業績集と絶筆も掲載した。

こうした特集を組んだため、通常号のような症例報告、研究報告は各1本の掲載となったことを御了承いただきたい。

<編 集> 早 期 胃 癌 研 究 会